

〈研究ノート〉

スミス研究の新しい展開*

——イタリアの伝統との関係——

田 中 秀 夫
吉 岡 亮

京都大学経済学会では、2005年10月8日にカナダの学士院会員、ブリティッシュ・コロンビア大学のロス名誉教授を招いて、アダム・スミス・セミナーを催した。5年前にも行っており、それには記録がある（本誌 参照）。

イアン・シンプソン・ロス教授は、グラスゴウ版の『スミス著作集』の別巻として出された新しい詳細な『アダム・スミス伝』（Ian Simpson Ross, *The Life of Adam Smith*, Oxford U.P. 1995）で知られる傑出したスミス研究者であるが、ケイムズについての浩瀚な大著『ケイムズ卿と彼の時代のスコットランド』（*Lord Kames and Scotland of His Day*, Oxford U.P. 1972）の著者でもあり、それはいまだ凌駕する研究の出ていない優れた作品である。新しい『スミス伝』も『ケイムズ』も師匠のアーネスト・キャンベル・モスナー仕込みの優れた伝記である。

モスナーに『ヒューム伝』（Ernest Campbell Mossner, *The Life of David Hume*, Oxford U.P.）があることは言うまでもないが、それは1954年に初版が出た。その後の新発見の資料の研究を踏まえて1980年に増補改訂版が出された。新しいスミス著作集の『スミス伝』はモスナーが書く予定であったが、ベトナム戦争で息子を亡くして以後、モスナーは意欲も視力をなくし、書けなくなったと聞く。いずれにせよ弟子のロスは代わって書く最適の人物であった。

* 本文中の略号は以下の通り。Corr: *Correspondence*, eds. by E. C. Mossner and I. S. Ross (2nd edn., 1987). EPS: *Essays of Philosophical Subjects*, ed. by W. P. D. Wightman, 1980. Account: Dugald Stewart, *Account of Adam Smith*, I. S. Ross. TMS: *The Theory of Moral Sentiments*, eds. by D. D. Raphael and A. L. Macfie, 1976. WN: *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, eds. by R. H. Campbell and A. S. Skinner; textual editor W. B. Todd, 1976. LRBL: *Lectures of Rhetoric and Belles Lettres*, ed. by J. C. Bryce, 1983. Anecdotes of Smith, The Bee, 1791. Mizuta: Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library*, Oxford, 2000.

伝記的叙述は研究としては掘り下げを拒む傾向があるから、それには批判もあるけれども、「英国の伝統」として確固たる地位を持っている。モスナーはアメリカ、ロスはカナダで仕事をしたが、ともにスコットランドにルーツをもつ。ロスの『スミス伝』（篠原久、只腰親和、松原慶子訳、シュプリンガー・フェアラーク東京、2000年）が早々に翻訳されたのに、モスナーの『ヒューム伝』が翻訳されないのは、日本のスミス研究者とヒューム研究者の違いを示しているのだろうか。スミスの著作で翻訳されずに残っているのは講義ノートの『法学講義』（Aノート、LJA）と『書簡集』だけであるが、ヒュームの場合は、『書簡集』や小品も残されているが、何よりも後期の名著『イングランド史』（*History of England, 1754-1761*）がいまだ翻訳されていない。『イングランド史』を日本語訳することは、大変な労力が必要であるが、その日が早く来ることを期待したい（部分訳の試みはある）。スミスの場合、『法学講義』Aノートもさほど遠くない時期に翻訳される予定である。モスナーの『ヒューム伝』の邦訳も出ることを期待したい。

最近ロス教授はイタリア思想などとの関係で、新しい研究を進めている。思えば、画期的な『アダム・スミス伝』が出版されてからすでに10年が過ぎている。10年も過ぎたのだから、教授のスミス研究に新展開があっても何ら不思議ではない。今回、報告していただいたものは、アダム・スミスの『国富論』（1776年）におけるイタリアの重要性に注意を促す研究である。歴史においても経済思想においても、イタリアの遺産は重要で、スミスは古代と近代のイタリアに強い関心をもって研究し、それを自らの著作の執筆に生かしたことが、詳細に追究されている。しかし、この主題はまだ掘り下げる余地が残されているようにも思われる。

今回のセミナーでは、教授は用意された草稿をもとに講演された。そして質疑応答を行い、最後に美山町へ小旅行を行った。道中ではロス夫妻が愛唱するロバート・バーンズをはじめとするスコットランド民謡を一同合唱しながら日本のハイランドの景色を楽しんだ。

以下、当日の草稿をもとに、講演の要約を掲載することにした。そうする価値があると判断したからに他ならない。要約は、イタリアの近代社会経済思想史を専攻している吉岡亮氏（本研究科大学院博士課程、日本学術振興会特別研究員）にお願いした。以下、要約でもあり、文献表記は簡略化してある。例えば、WNが『国富論』であることは断っていない。

イアン・シンプソン・ロス「アダム・スミス『国富論』のイタリア的背景：

歴史叙述とポリティカル・エコノミー」（要約）

スミスは古代および近代イタリアの思想、歴史、文学を終生学んだ。カコーディの学校（1732-1737）ではデイヴィッド・ミラーの影響でウェルギリウスの『アエネーイス』に親しんだ。ローマの軍事、政治、経済の面での世界覇権や衰退に惹きつけられた神童スミスはローマの各時代や諸制度の比較検討へと進んだ。後にスミスは歴史研究に入り、それを経済分析や経済政策と結びつけた。「ローマ人の宗教、政府、歴史について知らなければヴェルギリウスの企図（design）、技巧（art）、その時代の特徴的な美しさ（circumstantial beauty）を理解できない」とは『ローマ帝国衰亡史』で有名なギボンの言葉（Edward Gibbon, *An Essay on the Study of Literature*, 1764, New York, 1970, p. 30）であるが、逆もまた正しい。

ギボンはカルタゴ人のイタリア襲撃を思い描きながらハンニバルとともにアルプスを登ったと語った（*ibidem*, p. 108）。カルタゴの將軍は象を歩かせて高い山から下ろし、北イタリアの平原を渡り、アペニン山脈を通り抜け、運命のトラジメ湖畔まで来た。カルタゴ人たちにはテベレ溪谷に沿ってローマへ到る道が開かれていると見えたが、スミスも同じ想像をしただろう。スミスはエウトロピウスやユスティヌスなどの入門的教科書も読んでいたが、ギボンと同じくリウィウスからもこれらの出来事についての知識を学んだに違いない。スミスは修辭学講義でリウィウスの叙述の流暢さと「彼の著作すべてにわたり彼が保っている偉大さと壮麗さ」（LRBL ii, p. 57）を称賛しているし、晩年にはリウィウスを古代と近代を通じて最高の歴史家と評価した。

スミスはリウィウスの示唆で古代イタリアを自由への勇猛果敢な戦いと結びつけた。自由への戦いはスミスの政治経済体系において重要である。ローマがカルタゴに勝利した原因をスミスは自由のために戦うローマ兵士の道徳的高潔さに帰した。ローマの戦いの物語を好んだスミスはスコットランド衛兵だった祖父のように兵士になりたかったが、友人たち¹⁾が許さず、断念したとボズウェルに語った。ボズウェルはスミスのような学者が兵士になりたいとは馬鹿げていると思った（James Boswell, *London Journal*, F. A. Pottle (ed.), 1950, p. 248）が、道徳哲学者としてスミスはスキピオのような軍事指導者の寛大さと雅量を重んじ、道徳心理分析のための資料を軍事指導者の物語に見出し、

1) ロス教授の原稿では his family となっているが、James Boswell, *London Journal*, F. A. Pottle, 1950, p. 248 によれば、his friends となっているので、ここでは Pottle に従った。

「我々は軍事指導者に直接的な共感を抱く。彼らの恩恵を受けた人たちが彼らに感謝を表すならば我々はそれに直接的な共感を抱くし、感謝しなければ落胆する」(TMS II. i. 5. 3) と説いた。

『国富論』のスミスはカルタゴの没落とローマの隆盛の原因を常備軍への民兵の敗北に求め、これを明瞭で詳細な記録がある人類史の第二の大革命とした。第一の大革命はギリシア諸共和国がマケドニアのフィリップとその息子アレクサンダーが司令官を務める常備軍に敗北したことである。ここでスミスは共和国の自由の歴史家、国防に関する政府の役割を分析する経済学者として、民兵と常備軍を比較しているのである。スミスは忠誠が国家よりも指揮官に向けられれば常備軍は自由にとって危険になりうるとした。「カエサルの常備軍がローマ共和国を滅ぼした」(WN, Vi. a. 41) ののである。スミスは軍隊の歴史的考察から政治学、経済学への教訓を導き出したのだった。

スミスは1737年にカコーディの学校からグラスゴウ大学へと進学し、「忘れえぬ」ハチスンに教わった。ハチスンは宗教的、市民的「自由への熱烈なる愛」で知られた。ハチスンによってスミスは哲学とローマの道徳家、特にキケロとマルクス・アウレリウスに興味をかきたてられた。ローマのストア主義から得た多くの教訓は『国富論』の第三の背景である。ハチスンは「社交」というストア的徳を重視し、「最大多数の最大幸福」の追求を道徳的生活の目標として強調したが、それはイタリアで反響があった。

スミスはグラスゴウ大学からオクスフォードのベリオル・カレッジへ進んだ。国教会牧師養成のスネル奨学金を得ていたスミスは『人間本性論』のヒュームの懐疑主義に影響されたためか、聖職者に嫌悪感を抱くに至った。スミスは『人間本性論』を読んでいて処罰されたという逸話があるが、過酷な勉学による精神衰弱の薬として『シリシ』(Siris, 1744) でのパークリの助言に従ってスミスが多量に飲んでいたタール水を当局が没収した件のこと (Corr. Nos. 5, 6) であろう。この時期オクスフォードでは古典教育は衰退傾向にあったが、スミスは「人類の政治史」の習得に努め、余暇の時間を「洗練された文学作品」に捧げた。ギリシア語、ラテン語へと読書を拡大し、フランス、イタリアの作家を読むための現代語の十分な知識も獲得した。D・ステュアートによれば、スミスの目的は「異なる時代、異なる国家の諸制度、諸風習、諸思想の説明」(Account, I. 8-10) に精通することであった。

諸制度を重視するのは重要な選択で、この選択が「市民の歴史」の研究者とスミスと結びつけた。「市民の歴史」という概念はベーコン『学問の進歩』(Advancement of Learning, 1605) で導入された。スミスは図書館に1758年から60年にジャンノーネ『ナ

ポリ王国市民史』(*Istoria civile del regno di Napoli*, 1723)を購入した。それは1729年から31年に素性不明のスコットランド人のジャコバイト、キャプテン・オグルヴィによって英訳された。この歴史は「市民の出来事 (Civil Affairs) を扱うであろう。それゆえ私が間違っていないければこの歴史は完全に新しいものとなるだろう。そしてこの歴史においてはかくも高貴な王国の政治 (Polity), 法, 慣習がそれぞれ別々に扱われるであろう。」ジャンノーネの方法は以下の通りである。

「本書はほぼ1500年におよぶ時間の連続の中で次の事柄を語ろう。つまりナポリを統治してきた非常に多くの君主のもとでのナポリ市民政府の様々な状態, 変化や, ナポリがいかに多くの段階を経てついには現在我々が見ている国家に至ったのか, ナポリに導入された教会の組織や規則が原因となってそれがどれほど変化したのか, ローマ帝国時代にローマ人の法がナポリでいかなる習慣と権威を有し, それらがその後いかにして衰退したかということ, またローマ法が時代遅れとなったこととその再構築, その後さまざまな国家によって導入された他の多くの法のさまざまな運命, またアカデミー, 裁判所, 行政官, 法律家, 領主, 役人と階級, 要するに教会的かつ宗教的なものはもちろん政治的かつ世俗的なものも政府の形態に属するすべてを語ろうというのである。」(Pietro Giannone, *The Civil History of the Kingdom of Naples*, London 1729-1731, trans. Capt. James Ogilvie: Book i. [i]) スミスは「法学の進歩」を論じる際イタリアの市民の歴史という第四の背景を参考にこのジャンノーネの方法に従って講義しようとした。そして法学の進歩という主題は市民の歴史は『国富論』の従属的一分野なのである。

オクスフォード時代にスミスは構成と文体を磨くために現代語からの翻訳技術を訓練した。スミスはイタリア語の知識を得るために, 近代イタリア語の確立の鍵となる著作『クルスカ・アカデミー辞典』(*Vocabolario degli Accademici della Crusca*, 1735)と1743年にパリで出版されたアンニバレ・アントニーニ著『イタリア語, ラテン語, フランス語辞典』(*Dictionnaire italien, latin, et Francois*)を入手した。1758年に出版された同じ著者のイタリア語文法書, ジョヴァンニ・ヴェネローニのフランス語とイタリア語の教科書『イタリア語完全習得のための教本』(*Le maître italien, dans sa dernière perfection*)も所蔵していた。1764年から66年にかけてフランスに滞在した際に購入したのであろう。スミスはアリオスト, ボイアルド, プルチ, タッソーの騎士物語やダンテ, ペトラルカの詩, その他のイタリア語の古典を収集した。スミスの書齋は英語とイタリア語の韻律法の比較研究に従事した際に購入したアントニオ・ザッティ・アンド・

サンズ刊『イタリアの詩人』32巻 (*Parnazo italiano*, 1784-1788) を含むヴェネツィアの高価な書物が陳列されていることで有名となった。

オクスフォード時代のイタリア研究は1748年から51年にエディンバラで修辞学、法学、「哲学史」(科学史と科学的体系の歴史) のフリーランス講師を務めた頃に成果を見せ始める。その後スミスはグラスゴウ大学の論理学 (1751-1752年) と道徳哲学 (1752-1764年) の教授を務めたが、修辞学講義と法学講義の講義録が幸運にも残っている。また1744年にスミスが「未熟な作品」(Corr. No. 137) とヒュームに書いた、死後出版の『哲学論文集』(EPS, 1795/1980: 31-105) 所収の天文学史でも「哲学的探索を導き、指揮する諸原理」を説いた。これらの情報源から分かることは、スミスが古代ローマと近代イタリアの思想や表現技法、その歴史と慣習や社会経済的發展に強い興味をもち、そこから教訓を得て広く適用したいと思っていたということである。

「現実に作用している種々の動きや現象を想像のなかで互いに結び付けるために発明された仮想の機械」を構築するというスミスの概念を明らかにするという点で天文学史は重要である。機械装置の進歩という概念を刻み込んだのは印象的な線画をもつウィトルリウスの建築論第10巻だった。スミスによれば宇宙の体系は最初の機械と同じく複雑である。「一つの大きな結合原理 (connecting principle) があらゆる種類の物事で生じている非調和的現象すべてを十分に一緒に結びつけるということがしばしば後から発見される。」(EPS 66: iv. 19) 天文学はスミスにパラダイム転換の具体例、プトレマイオスの体系を越えるコペルニクスの体系、コペルニクスの仮説を立証するガリレオの望遠鏡による観察、引力という唯一の説明原理を使い他の全体系を凌駕したニュートンの体系を教えたのである。

スミスは1655年と翌年にポーニャで出版されたガリレオの著作二冊を所有していた。ガリレオの異端審問、つまりイタリア半島における科学の発達に影響を与えた思想の自由の抑圧に関して、イタリアの科学者の「不幸」を語ったスミスはプロテスタント国家の市民的自由を享受し、「道徳的ニュートン主義」に基づいて修辞学、倫理学、経済学を統合する体系を構築した。ガリレオに由来するこの方法論を駆使してスミスは倫理学と経済学の「理論」、その「哲学的歴史」を提出した。また「文学、哲学、詩学、弁論学といったあらゆる異なる分野の一種の哲学的歴史」と「一種の法と統治の歴史と理論」を計画していたスミスは「ギリシアとローマの共和国についての論文」を書くつもりだった。

修辞学講義はタキトゥスの心理的洞察力やグイッチャルディーニの歴史的判断という

ような歴史叙述上の価値を強調する歴史家の歴史を含んでいた。「近代のすべての歴史家のなかでただ一人、どちらの党派にも属さないで諸事件を語り、それらをその原因に結びつけるという歴史の主要な目的に満足していた」²⁾ マキアヴェッリが提出した、傭兵軍 (standing army) は愚策とする当時流行の政策と対立する原理 (LRBL, ii, p. 69) を評価したスミスは、『国富論』で外的脅威に直面している国家を考察する際に、マキアヴェッリの常備軍 (standing army) 論にさらなる賛同した (WN, V. i. a. 37-41)³⁾。スミスはグイッチャルディーニの状況に応じた変化より、マキアヴェッリの率直さと公平さの方が好ましいとし、グイッチャルディーニの『イタリア史』を「歪んだ小手先の術策についての批判的論文」(LRBL ii, p. 71) とした。しかし『国富論』ではグイッチャルディーニの評価は上昇し、1494年にフランスのシャルル8世が侵入する以前のイタリアの改良状態について引用して、彼を「現代の歴史家のなかで最も賢明で控え目な歴史家の一人」(WN, III, iv. 23) と評価した。

スミスの修辭学講義は歴史的著作の不偏性と明確な構想を学ぶという目的や原因だけでなく心理学も扱う必要性を説いた。模範とすべき歴史叙述についてのスミスの教えは有益なものであった。『国富論』を形作った歴史叙述の伝統についてはギボンが役立つ情報源となる。ギボンはスコットランドの啓蒙思想家を師と仰ぎ、1776年にヒュームを「スコットランドのタキトゥス、リウイウス」(Edward Gibbon, *Letters*, ed. by J. E. Norton, London, 1956) と絶賛した。その後『ローマ帝国衰亡史』の最終第6巻で、ス

2) 水田洋・松原慶子訳『アダム・スミス修辭学・文学講義』名古屋大学出版会、200ページ。

3) ロス教授の記述には矛盾があるように受け取れ、注意が必要である。LRBL ではマキアヴェッリは常備軍 [standing army] に否定的であると解釈できる。一方ロス教授がレファレンスに掲げている『国富論』V. i. a. 37-41 からは、スミスが常備軍 [standing army] に対して高度な文明社会には必須と肯定的評価を下している。とすれば、「常備軍に否定的見解を示している」マキアヴェッリに、『国富論』の当該部分において、スミスが更なる同意を示したとする本稿のロス教授の記述は矛盾することになる。この矛盾は standing army を「常備軍」と一律に訳してしまうことから生じるように思える。この矛盾が表面的なものに過ぎないことを理解するためには、本稿において用いられている standing army が二つの意味を持つことに注意しなければならない。すなわち、マキアヴェッリの『フレンツェ史』第2巻、18や、『戦争の技術』を参照すれば、マキアヴェッリが否定したのはいわゆる常備軍というよりも、軍事を生業とする者からなる傭兵軍である。マキアヴェッリが推奨したのは、軍事を日頃の生業としない市民軍 [国民軍] の創設である。従ってマキアヴェッリが愚策とした standing army は傭兵軍を意味している。一方、『国富論』V. i. a. 37-41 における standing army とは常備軍を意味しているが、スミスの意味での常備軍はマキアヴェッリにおける市民軍 [国民軍] に近い。従って、マキアヴェッリの意味での standing army [傭兵軍] を否定することは、スミスの意味での standing army [常備軍] を肯定することと矛盾しない。以上より、standing army を「傭兵軍」と「常備軍」の二通りに訳し分けた。

コットランド人が市民史の松明をイタリアの祖先から受け継いだと称賛し、ローマの自由のための最後の戦いやローマの自由を抑圧した教皇に言及し、ギボンがそれが当時の最も高貴な作家の主題だと書いた。

「特に優れているのはグイッチャルディーニとマキアヴェッリであり、前者は一般史やフィレンツェ史でその主題を論じ、後者は『君主論』と政治論集で論じている。彼らの優秀な後継者フラ・パオロ・サルピ（『トレント公会議史』イタリア語1619年、英語1620年）、『教会録史』1608—1610年執筆、1675年出版）やエンリコ・カテリーノ・ダヴィラ（『フランス市民戦争史』イタリア語1630年、英語1647年）も加えて、最近になってスコットランド人が彼らと誉れを争うまで、彼らはまさに近代言語での最初の歴史家であると評されていた。」（Gibbon, *Decline and Fall*, 1994, iii, p. 1058, n. 89）

さらにギボンはナポリ人教皇パウルス4世の「野心的だが女々しい敵対行動」を断罪する典拠を論じて、それらの思慮深い歴史家にジャンノーネも加えた。パウルス4世はイタリアから神聖ローマ帝国とスペインを排除し、半島における教皇の世俗的権威を再び強固にする事業に失敗した（Gibbon, 1994, iii, p. 1058, n. 91）。「聖職者の権力の進展と濫用」や暗黒の時代のイタリアの諸革命や、「宗教的に重大な主題に対する皮肉や批判」の使い方をジャンノーネから学んだ、とギボンは晩年『回想』の草稿に書いている。

ギボンによればジャンノーネの目的は「ローマ帝国の諸起源と諸変遷およびローマ帝国の崩壊後に多くの支配者、新しい法律、新しい習慣、新しい王国や共和国がどのように起こってきたのか」を説明することであった。ジャンノーネは『市民史』の中で、イタリア、とりわけナポリ王国においてローマ教皇が世俗の権力をどのように侵害したかを示そうと努力した。スコットランド人歴史家（ロバートスン、ヒューム、スミス）には、ジャンノーネの用い方に重要な違いがある。ロバートスンは『カール5世王国史』（1769年）で、ジャンノーネを参考にしながら商業、軍事力、教皇の王国とナポリを含む諸王国の制度を論じた。ロバートスンはローマ教皇が精神的権力と世俗的権力を混合したと認めているが、教皇位の篡奪という主題を発展させず、ジャンノーネとは異なるアプローチをとった。ダニエーレ・フランチェスコニによれば「ジャンノーネは法制度と行政構造の変遷を再構築して法体系の歴史を書いた。ロバートスンは財産の所有（assetto della proprietà）、権力の配分、礼儀正しさと文明の発展という三要素の関係に着目する視点で市民政府と習俗（manners）の体系の歴史を書いた。」⁴⁾

4) Daniele Francesconi, "Transformazione della storia civile da Napoli a Edimburgo, 1723-1769", *Briten啓蒙に関するカンファレンス* (IULM, 2004, Sep, Milan) での発表原稿による。

ヒュームはジャンノーネの大著の1760年から63年の版を所蔵した。「古代」、暗黒の時代と中世を扱うヒューム『イングランド史』の最後の二巻の出版は1761年であるから、ジャンノーネを参照している可能性が高い。ヒュームはノルマン人によるイングランドへの封建制度導入が政治的自由に否定的影響を与えたと強調するが、ジャンノーネはノルマン人によるシチリア支配とその法制度に肯定的であり(1731: Book xi. 530-559)両者は異なる。しかし、教会—国家関係では両者は接近する。ローマ教皇たちが精神的な事柄においても世俗的な事柄においても君主として振舞うことをジャンノーネは詳述した(1731, Book xix. 46-7)が、ヒュームも同様の議論をした。1162年から1170年のイングランドの危機、カンタベリー司教トマス・ア・ベケットが(国王ヘンリー2世に反抗し)教会とローマ教皇を擁護した事件を、ヒュームはジャンノーネと同じ方法で次のように論じた。

「俗界と教会の権力を結合した最上位の執政官が君主 (prince) と称されようと高位聖職者 (prelate) と称されようと本質的な事柄ではない。世俗的な利益は精神的な利益にもまして人間の理解力のなかでは一般的により重要であるゆえに、人の性質のうち世俗的な部分が最も優勢なものとなり、ついにはあらゆる間違った宗教のなかで聖職者の權威の主たる基礎となっているひどいペテンと頑迷な迫害を防ぐのだ。しかし教会の篡奪が進行する間、国家は世俗の執政官の抵抗によって自然に動乱へと投げ込まれる。君主は自身の利益のため、また公共の利益のために終には非常に危険で狡猾なライバル [聖職者] に対して十分な防壁をつくる必要がある。」(Hume, *The History of England from the Invasion of Julius Caesar to The Revolution in 1688*, foreword by W. B. Todd, 6 vols. 1778, i, pp. 312-313)

ヒュームは、世俗の権力と教会的権力が一人物において結合されている場合には世俗の権力が優位すると軽卒に結論した、とギボンが批評した (Gibbon, *Decline and Fall*, Penguin, 1994, iii. 1058, n. 93) が、スミスもまたヒュームと同意見であった。ジャンノーネ (1731, Book xix. 51-4) とサルピの『教会録史』に基づいて、スミスは中世ヨーロッパにおける教皇の絶大な権力の伸長を記述した。教皇に「当初ほとんどすべての司教職と修道院長職への任命権があり、そしてその後さまざまな陰謀や口実によって各教区に含まれるより下級の (教会禄付の) 聖職のより大部分の任命権を手にした。……この仕組みによって君主の状況は以前よりもまだ悪かった。」ヨーロッパの聖職者は「ある種の精神的軍隊」を形成し様々な場所に分散していたが、「彼らの運動と活動はすべて一人の長によって命令され、一つの均一な計画のうえに導かれることができ

た。」13世紀まで、その後もしばしば「世俗の市民政府の権威と安全に対抗して形成された最も手に負えない結びつき」が発展した。「その結びつきは市民政府の保護があつてはじめて栄えることができる人間の自由、理性、幸福にも対抗していた。」

しかしながらヒュームとは違い、封建領主の権力を破壊した技芸 (art)、手工業、商業の漸進的改善がヨーロッパ中で聖職者の世俗的権力を破壊したとスミスは言うのであった。(WN, V. i. g. 21, 24-5)。かつて荒れ狂った封建領主が派閥争いに対する執着や交戦的な精神という遺産をやがて忘れ贅沢にふけり、時の権力の抑制を受けるようになったというスミスの主張の真意をギボンが理解していた。「習俗と出費の漸進的变化はアダム・スミス博士によって見事に説明された。博士は最もけち臭く自己中心的な原因から最も有益な効果が流れ出てきたことを、おそらくきわめて簡素に証明している。」(Gibbon, 1994, iii. 1058, n. 92)

次の問題は1750年から翌年にエディンバラで行われた法学の講義である。スミス伝の著者ステュアートは1755年グラスゴウの協会でスミスが読んだ論文の二つの抜粋を記録した。その論文はスミスによれば6年前に初めて行った講義に立ち戻つたもので、グラスゴウ大学道徳哲学講座の自然法学と政治学の部門を1752年に引き継いだ際に、繰り返されたものである。ステュアートによる最初の抜粋は『道徳感情論』と『国富論』の「見えざる手」の議論に先じる。その起源はクレアンテスが『ゼウス神賛歌』(Hymn to Zeus) で賞賛し、セネカが『書簡』(Letters) で示す「秩序ある宇宙」の自然の調和というストア派の教義に見出される。第一の抜粋はこうである。「計画者たち(Projectors) は人間の事柄において自然が作用する間その自然をかき乱すのだが、必要とされるのは自然が自身の意図を実現できるようにただ自然を放っておき、自然にフェアプレーを与えることのみである。」第二の抜粋は「自由市場」の概念を示す。「最も卑しい野蛮な状態から富裕の最も高い水準にまで状態を持ってゆくために必要なのは平和、軽い税、裁判のよき執行である。その他はすべて物事の自然のなりゆきによって与えられる。この自然の成り行きを妨げたり、物事を別の方向へと無理強いしたり、ある段階で社会の発展を止めようとする政府はすべて自然にそむく。また自己保全に努める政府は抑圧的か専制的にならざるを得ない。」(Account, IV. 25)

「野蛮」から「最も高水準の富裕」な商業社会へという市民社会の歴史の叙述は明らかに「自由市場」のための枠組みなのである。スミスの1755年の論文の主題、エディンバラでの法学講義の主題は「自然に反する」政府の介入は経済成長を挫くというものだった。この主題はスコットランドではフレッチャーが1703年にすでに議論していた。

それは『人類の共通善に関する政府の正しい規制についての談話』⁵⁾と題され、1749年の『政治著作集』に収録された。

しかしスミスはなぜこの主題をエディンバラとグラスゴウの法学講義の中心としたのか。『国富論』に結実する講義の発展においてイタリア史や市民史家はどのような役割を果たしたのか。手がかりは1769年3月のヘイルズ卿 (Lord Hailes: 高等民事裁判所判事, 古事学者) へ宛てたスミスの手紙にある。これはスミスが『国富論』を構想し、ヘイルズ卿がスコットランド議会法令集の考察を書いていた時期である。「私は異なる時代と国々で裁判を管轄してきた計画 (plan) の概略に関する一般的概念を形成する目的ですべての法を読んできました。ですから私は個別事項の詳細にはほとんど立ち入っていません。それについては貴殿の方が詳しいと理解しています。」(Corr. No. 116) これは法学講義でスミスが学生に、『国富論』で読者に示す総括的展望である。イタリアは何世紀の間西洋の中心で、『国富論』でも中心を占める。エディンバラ講義に出席し、グラスゴウ大学市民法教授、スミスの同僚・友人となったミラーによれば「スミスはモンテスキューの示唆に従って公法と私法双方の最も粗野な状態から最も洗練された時代への法学の漸進的発展を跡付けようと努めた。……類似の改良ないし修正を施すことで生活の糧や財産の蓄積に資する諸技芸の効果を明らかにしようと努めた。」(Account, I. 19)

スミスにとってモンテスキューの最重要な見識は彼が社会経済環境が変わるなかで人間の必要に応じて法が変動すると見た点にあった。法学講義のスミスはケイムズ卿やヒューム、チュルゴ、プーフェンドルフと同じく人間が通過する異なる4段階を辿った。スミスは4段階を狩猟、牧畜、農耕、商業と結びつけた。第一段階は財産も政府もない。牧畜が職業となると家畜の私有から財産が蓄積される。農耕社会では都市は防衛の拠点として発展し、最初は王、次に貴族制、最後には民主制によって統治された。そしてついにローマは「征服する共和国」となり、さらに拡張する帝国となった。しかし拡張する帝国の成功は衰退の種をもはらんでいた。征服、富裕、政府の拡大が可能とした農業と商業の専門化は牧畜段階にある辺境の交戦的部族から徴用した軍隊を必要とし、最後には彼らがイタリアを侵略したからである。

5) Andrew Fletcher, *An Account of a Conversation concerning a Right Regulation of Governments For the common good of mankind in a letter of the Marquiss of Montrose, the Earls of Rothes, Roxburgh, and Haddington form London the first of December, 1703, The Political works of Andrew Fletcher, Esq; of Saltoun, Glasgow, 1749.*

スミスは西ローマ帝国が羊飼いの攻撃で崩壊した経過を示した。羊飼いの社会はヨーロッパの中心地域にあり、完全私有制のちに封建的土地保有を採用した。領主に対抗する同盟を求めて君主は都市に特権を与えたが、都市は政府の混乱に乗じて独立した。人口が多く、要塞化された大規模なイタリア諸都市は教皇と神聖ローマ帝国の対立の結果独立した。ミラノ、ジェノヴァ、ヴェネツィアは他の西ヨーロッパが16世紀に到達した経済成長を14世紀までに達成したが、富裕により勇敢さが失われ、腐敗に陥った。

こうしたイタリアの諸共和国の自由の喪失についてのスミスの分析はモンテスキューが導いたものであり、モンテスキューのマキアヴェッリとグイッチャルディーニ理解がスミスに影響を与えたとも想定できる。モンテスキューはムラトリー編『イタリアの事柄についての著者たち』⁶⁾からラデヴィグスの『フリードリヒの治世』⁷⁾を引用した。スミスもまたジャンノーネの他にサベッリコ著『ヴェネツィアの国家史家』を大学図書館のために購入した。さらにスミスはサベッリコのその著作とジャンノーネの1770年版の5巻本を所蔵していた。(Mizuta Nos. 1468 and 679)

スミスは人民と主権者の両方を豊かにする経済学を提案し、「政治家あるいは立法者の学問」と定義し、法学講義でその主題を見出してから、12年以上の考察をしていた。さらにスミスは1766年パリ滞在中にチュルゴなどケネーの仲間と出会い、資本の循環、経済における生産部門と非生産部門の区別とその間の均衡という新たな観点を学んだ。

こうしたことに加えて、イタリアで発展した経済学の新思想も『国富論』の背景となっている。『国富論』を仏訳した知人アベ・モルレが、イタリアの経済学をスミスに教えたように思われる。1759-89年の間に仏ナポリ大使館書記官であったガリアーニの『貨幣論』は、スミスの労働価値説と自己利益を追求する個々人はしばしば全体の幸福を促進するというスミスの議論を先取りするものであった。ガリアーニは市場メカニズムより生じる利害の調和を神の意図に帰したが、スミスは「見えない手に導かれ、意図せざる結果を実現する個人」について書いた。(WN, IV. ii. 9)

スミスはベッカリーア公爵の偉大な刑法学の著作『犯罪と刑罰』のモルレによる仏訳版(1766年)も手に入れた。公爵は拷問、殺人、自由を破壊する道具を告発し、最大多数の最大幸福を目指す君主を支持した。スミスは彼の言う自由に共感を抱き、ハチスン
の道徳的目標がイタリアで支持されていることを知った。ベッカリーアは1766年にア

6) *Rerum italicarum scriptores: raccolta degli storici italiani dal cinquecento al millecinquecento ordinate da L. A. Muratori.*

7) *Radevicus, de gestis friderici.*

レッサンドロ・ヴェッリとバリに滞在した。ヴェッリの兄ピエトロがフィロゾーフとの接触を勧めた。三人の『イル・カフエ』誌は啓蒙思想から着想をえて、経済改革等を論じた。スミスはヴェッリの『政治経済学考察』の初版と第6版を利用できた。

1790年7月24日の『ロンドン・タイムス』のスミスの死亡記事に、『国富論』の経済体系がピエトロ・ヴェッリの体系と同じとあるのは言い過ぎだが、両者には顕著な類似性がある。二人は市場の拡大、商品だけでなく「思想、欲望、必要、知識」をも運ぶ市場の拡大が経済成長であるという考え方を重視していた。両者は国民の生産と消費の結びつきを強調し、それらの関係という観点から経済的發展と衰退を分析した。両者は重農主義者の議論、手工業部門は不毛で農業だけを生産的とする議論を退け、また衡平、一定、便利で、人民に重荷とならない税がよいとした。スミスとヴェッリは独占と特別な利益団体、ギルドや共同資本会社の圧力を否定し、臣民の衡平な自由の原理を支持した。

スミスは最善の行動を求める古代の雄弁家に訓練された修辞学者、有徳に努めよと同感に訴えた道徳家、公正を目指すヨーロッパの市民史家、『国富論』の冒頭2編の理論から連続的な制度發展の歴史の例証へと進んだ政治経済学者だった。国民は貧困から自由になるためどのように富を創造しうるか、自立的・平等主義的・道徳的な利己心の發展はどうすれば可能かを教えたいと望む経済学者だった。こうしたスミスにとってイタリアの背景は何を意味したのだろうか。

スミスがイタリアに見出したのは魅力ある自由の物語、しばしば失われ破壊されるが、常に熱望され、周期的に再興される自由の物語なのである。スミスはカルタゴの圧倒的な力に対抗して自由のため抵抗した最高の日々を共和国ローマを語るリウィウスの叙述、またタキトゥスの『歴史』の重要性を詳述した。スミスのよき友ヒュームも『人間本性論』のエピグラムをタキトゥスから引いた。「感じたいように感じ、思うことを言うということが許されている時代の稀な幸福」(*Rara temporum felicitas, ubi sentire, quae veils[velis]⁸⁾, & quae sentias, dicere, licet.*) という、『歴史』のこの冒頭の文章はドミティアヌス帝(81-95年)の恐怖政治時代に書かれた。タキトゥスは生き残り、トラヤヌス帝(98-117年)とハドリアヌス帝(117-138年)のより自由で、より幸福な時代を享受したが、しかし共和国の自由が過ぎ去ったことを残念に思いつけた。

マキアヴェッリやグイッチャルディーニがフィレンツェ人は危機を脱するために自由

8) ロス教授の原文では、veils となっているが、velis を意味するものと解した。

を貴族に委ね、多大な犠牲を強いたと語る意味をスミスは理解していた。こうした負の評価にも関わらずスミスはイタリア諸都市は商業で富裕になった嚆矢であり、ポルトガルやスペインとは違ってアメリカ大陸発見後も退化しなかったと評した。スミスによれば外国貿易を扱う商人の良識こそが他のヨーロッパ域と比べて諸分野の改善と洗練を可能にしたのである。確かに初期ローマ帝国の征服は「野蛮と宗教」の結果であり、「イタリアにおける自由の友」は「専制政治の鉄の輪で四方を囲まれてしまった」とギボンは断言したし、1748年サヴォワの地下牢でのジャンノーネの死をローマ教皇やナポリ権力者が歓迎したということをスミスは知っていた。しかしながら、土地所有者、耕作者、商人や手工業者に繁栄を保証するジャンノーネの処方箋は、古代と現代イタリアの忘れてはならない最高の希望、「完全な正義、完全な自由および完全な平等」(WN, IV. ix. 17) として、1776年以後も響き渡ったのである。